



斯箕魯默兒砲痍論卷一
佐孫尚中譯

44
1442
1



慶應元年 丑仲夏新雕

舜海佐藤尚中譯述

斯篤魯默兒砲彘論

濟衆精舍藏



外國炮礮之盛。聞者莫不駭震。
予謂一車之礮。三軍之國。多戰其
民靡有孑遺。既而國士人之。礮不甚
為用。不足憚也。蓋然矣。但不能識之。
也。世之仿之者。一旦及之。士拚命報
國。醫救之。報國。雖事異之。一以起

91-2074

石丸言
河東精舎
別一。佐藤氏譯斯書。其言亂使曾
海深と治術。國家不立亂於治。為
謀於海。家ふ可ふ攻治術也。

静の心也



斯篤魯默兒砲癩論卷一



佐倉 佐藤舜海尚中 重譯

○砲丸の中より骨傷はちとよて尋常の骨傷は
肉爛を兼ねる者の治療は同一と事と思ひしに
千八百四十九年吾國セ子マルカ國と確執起り
予醫長を奉りてスレーズウェーキホルステイン
の軍隊に在て野戦に赴き親しく二千餘の創者
を療せしむ皆奇異の變症を生じて全く尋常の

創痕は異なりあり

○礮丸實丸破裂丸の一片又は砲丸礮丸に觸るる所の皮肉は崩れて綿のたもと骨は碎けて粉となり其さま尤も木となく一懼る一傷所の生機むとろへ尿管は破れて血滯り神経の感應失せく遂に壊死を若く神経を劇しく震撞すれば總身灰のたもと白く變り手足厥冷脉疾小等の諸症を顕し虚憊極り多く其場にて即死すさつらさへ一晝夜のうちに斃る死期や延るも傷所より下部に多く壊死に變るの一

症を合せて大抵四日前後にて斃る驚怕十八は死期立ともろに迫る礮丸より手足を打斷る者は殊に此死をいづれ手足のうちにて體軀に近よふるといふに危しとて予手を傷き者四人を死せり其一人は正肘骨より裂斷し幸に癒ゆことを其餘の三人は肩の三隅筋の所より裂斷して三日の内は皆死せり一人は肩術を行又カノン丸にて上臂骨を裂斷り較り切斷あり速に其上より鋸で断けるに脾臟破裂肋骨折傷肺傷肺傷はうたふとさき木のてれ手肋をたぐきて得ずらぬのな

一 等の諸症起りて八日^{より}て命を殞せり凡
 そ手足の裂断^{ちぎ}としものは腎臟破裂して其諸症
 を顕り^り嘔吐止まを手足氷の^たとく^くは冷え小
 便^の血を混せ其症漸く^くは化膿^は遷^まは初^めの鋸
 き断ち^り創口は斂^るとい^へと^とを遂^はは死する
 者多^し志^しう^へハ手足の礮傷^は同時^には内臓を損
 傷する者多^しと知る^べし足傷^{より}は手傷^殊は
 尤^もを兼^やや^しと^しと^しと鋸断術^ハ手より足^は行
 ふを危^しとす

〇礮丸^は觸^れて^は四支の骨の^は碎^けて皮肉は色^は
 〇變^らゆる^るその^は壞死^は陥^りや^し手足を
 裂断^らる^るもの^は又危^し庸醫^ハ皮膚破^れを^は
 る^の故^はつ^はは此骨折^を思^ひて意^を注^める^る
 その^は精^しく診^をハ骨碎^{けて}粉^となる^其瑕
 裂^已は他所^はひろ^うり^を知ら^ず傷所^を按
 す^とハ碎骨相啣^ひ合^ひて聲^を放^ち傷者自^らす
 ち^も動^すと能^く若^し傷處^は口^あら^ハ指
 を挿^入して^は戰場^{にて}直^ちは切断術^を
 施^し居處^を移^さす介抱^をハを稀^は救^ひ得^べ
 一若^し遠方^は運^ひた^とハ名療^を盡^すと^も

死を免れし予曾てカノン丸の中りて骨の單折を受しもの僅に只一人を免れりとの其外一人折骨の尖りて皮肉を撞き破り者ありき○スレストウキホルステインの野戦にカールテツ丸の傷者一人も免れず昔フレールビュルフの役より免れりし者ありきと傷口は歩砲丸は異なるなりとありき凡そ軍中より歩砲丸ビュクス丸手砲丸より打るるもの多し殊に子マルカ人ハ手砲の彈丸を遠く隔る所より雨の如く續け打り放せり此丸ハ形は尖りて推の實の如く

大小二とありしは小形ハ大形の半分より其重量はビュクス丸は畧同一く其能ハ歩砲丸より類を歩砲丸とビュクス丸は形は圓く手砲丸ハ形は尖りて尖りたる丸は骨を碎く此勢ハ猛といふ世間の説も然と一度も其證とすべしと逢を當時の治効より推せば尖圓の兩丸とも骨肉を傷ふに至りてハ相同し又衣服に残る砲痕より丸形を占ひ尖丸ハ丁字状の痕裂を残し圓丸ハ圓孔を穿つと云ふも其あまを信し予フレデリキアの戦より一士

の砲割を療せしに衣服の砲痕ハ圓くありし尖
り丸を肩胛骨の下窩より掘り出せり此丸大
胸筋と肩胛骨とを前より後ろと向て貫き肩胛
下窩内より止りて布片と綿とより包まれり又
一士頭を打もて死する者あり友人其帽をさる
と装革より丁字状の砲痕ありけしハ尖丸より中り
て死せしと思ひしは頭を解きて圓丸を得り
砲丸骨より中るの別ある事を論す

○第一 砲丸骨より中るの別ある事を論す
骨を碎りす扁平くま
りて骨表より着くものあり丸より觸る所の骨ハ

血虚しく色ありくちを骨衣破るるよりして其
處壞死せり大長骨の傷者を群集する病院に入
るるとハ骨内より膿を醸して髓中より浸淫し漸く遠
方よりおよび静脈遂に其膿を吸ひて膿毒のため
に死す此屍を解きて傷骨を縦に鋸を開きて正
しく見て證とする所より彼頭蓋骨を撲ちて療
治よりけしハ骨内より膿を醸し又静脈洞より托
膿炊衝を起し砲傷骨とありしを轉歸をいす
は常の事あるに持り撲傷の懼るべき危き症あ
るは昔より論ししことと砲傷骨ハ今よりいしるま

て捨て意とせしむるハ何事ぞ名

○第二 骨丸の中りて折るるものあり折るるは
 正折邪折の別あり又丸路骨の中りて曲りいで
 入路と出路と正對せざるものあり又骨を洞貫
 して圓孔を穿ちて折るる者あり此症を辨ふる
 には砲創の位置を精しく察し折骨の相啗いて
 聲を發するまで知り別く此一此症ハ都て治し
 易く大腿骨の如き太きものも速に癒ゆるあり

○第三 砲丸骨の中りても其内質を崩さず外面
 よそを以て繞り外圍を破斷するものあり予フレ

テリカの野戦は大腿骨結の上二寸彼邦の二兎母をいふ以
 下是の所を打てしそのありけるを療せり其
 丸前より入りて破骨片の後ろより取り出せり
 とそと取て出せりその骨片を見れば半圈状を
 有せり

○第四 砲丸骨内より止りて別は患をなす者
 あり跗根骨腸骨小腿骨の海綿體におけるもの
 是なり

○第五 砲丸骨を貫き一穴を作て別は破碎せ
 ざる者あり頭蓋骨より髑骨正肘骨箭骨等

もたゞよあらずたゞ繞り肉を傷るにちきて一旦ハ焮衝を劇しく起せざる治りやま

○第六 砲丸骨内ニ打入まきて激して出るそのあは骨質を細くは碎き其瑕裂るもの較節より一と此症ハ臂節膝節等より毎二見より是ハ監定しかくさのこならを較節より及一る瑕裂ハ細くは指より探り知りしものハ確断するはと能くさふとありあり較節の轉動初めハ妨げあるはと創所夥しく膿を醸して焮衝較節よりおよへハ防焮法を行ひとを驗しふ

く遂に化膿せりコルシクの野戦の後キリスチアンスヘルトに膝節砲傷の者四人を療せしと數日の間ハ四人共皆その足ハ保全ましく見えけと三人ハ遂に鋸で断ちけをちれを解剖して見しに瑕隙較節より及つて其餘の一人ハ全く保全せり是等の瑕隙較節よりおよえさるそのと見えたり又一傷者ハ跗節の上を後ろより打たれハ輔腿骨を擦過て出けと跗節より及るせりは痛堪えり腫甚しよりちりされと氷片より傷所を覆ひ大量の阿片を

與一其驗一著一く只跗節の強直を遺せる
のくくを治せり此外ハ切斷術を行なすて治
一そのを見す

七 砲丸長骨ニ真向ニ中リ其所を粉の如く
碎きて通リ過き傷所の上下を縦ニ破リ裂き
たは遠き所まで延くそのあり小腿骨尤も是
ニ罹るたと多し小腿骨ハ輔腿骨と並ひあらず
輔腿骨傷つたはせんきとより其破裂を察し
ゆるゆる放し破骨を取り出し繃帯を行
へ其足ハ保全をく思へとちと危き病症を

目前ニ顯々として入りと炊衝の漸く蔓延
ア膿を醸すと甚く外表を割開けと此を漏
一盡しゆる漸く肉中ニ浸淫一或ハ細脉出血
を誘ひ出すハ切斷術をくハ命を救ひ
稀くハ腐骨出て自ら志し細脉出血ハ静脈
の膿を吸へむ正症をして又血の凝りて大静脈
を栓塞すとハ鬱血歸する所なく創内ニ哆ける
細脉より漏れ出て細脉出血となるあは
ク等の細脉出血
ハ之ニ異なり
中砲骨痠の探搜を論す

○肉創の指を挿入するに障るべきものハ指を
探るを尤も妙とて傷状の甚きをやすきハ此を
過る事ふしとて醫者多くハ探針にて探る
故に鑿定を誤る予亦其むねえたるも
らす戦に臨みてハ軍醫探針を腰に帶る事
忘れて創をみるを皆指を用ふる事予も戦
場にあててハ溝探針の外ハ其用を思ひ出さ
ず凡そ常の骨傷ハ骨衣全く離るるもの
又ハ少しハ砲創ハ骨衣離るるハ破る骨片其
所を脱す見る所常と異なる事と云はれハ傷

をさす事を知りて予曾て見し一症
の如きは正肘骨の上端碎けて較節に及ぶと
外形見悉くならず較節の轉動も自由ならず又
指を用ふるも砲丸の入る正路より順とせざ
るを欺るやと又砲丸骨の中を走らせ其
道を轉し更ニ肉中を彎入るるものハ探る指
骨に傷あるを打過して曲路に入る事ある都て
丸路をわけはれハいよる探るや或ハ全く
探るべからずして時日過るに續發症より其本
傷を諒察する事と云はれあり

骨瘻の吉凶を論を

○砲丸を骨を傷くを以て尤も危しとす皮肉のみ
をそくちて一に傷者其所より血の出るを以て初
て創を受しと知るなり若し砲丸骨の中をハ傷
者立とちらふは休む或ハ翻轉し或ハ旋轉す且神
經の震撞を顕く一假死厥冷顔白脉疾小等の諸
症數日退らず癒るも亦猶數日を延く凡そ此
吉凶を論するは骨を傷くはと廣く瑕裂の及ぶ
やとそくちて且つ體軀に近きハ大凶とす
一其次ハ續發焮衝の有無に係り傷骨の碎

片皮肉を刺ぬるとハ焮衝の勢をやしむて治療
を妨く一上下臂と小腿とハ兩骨共並ハ傷人
とき人是を上臂大腿の骨傷と比すはハ焮衝も
甚しく癒るも亦遅し瑕裂の速方及ぶ否のハ
骨傷ハ此論ハ非す
ハ續發の焮衝ハ特リ骨傷のこく起るものな
らす折骨の鋭尖皮肉に觸れて其勢を熾ます
そのかり治術に臨みて意を此に用い一其次
ハ膿毒あり病院よりハ膿毒を醸して傷者に染
傳ふ是れとせらるる危き一症は是れ懼り死す
るそのハ予屢々實驗せり手足の骨傷體軀に近

けとハソよし是と染やま一體軀の内よてハ
髌骨尤も危し蓋し骨傷ハ肉傷とちうハ數月を
過さハハ傷面の汚穢去らず肉傷ハよらんを去
を拭つを忽ち好膿
口を生してちうのこをらす骨髓の静脈断口哆き
て久しく飲らす悪汁又悪 ちんより入る 肉傷の
忽ち口漸く深く海綿質髓質と積りて膿と化し
静脈ハ
較節におよみ更又大静脈より血行と混りて血
と共に全身を循環す是を膿毒病といふ予曾
て股を傷りて膿毒を久しく病に死ぬるありと
かりきりしもの股を切断しと傷所の静脈中

を膿を見す却て其上部に當りて傷所は口を
接ふる静脈に膿の充るを見ゆれば是を治
するを骨の傷面に藥消酸銀の類を塗りて膿
の髓中に透るを遮るの方を考へ施す緊要な
る一予ハいす其良方を知らず後人の巧
を待の但し骨傷ハ其所一直ちに手當を施す
このよきもの多ければとめて膿毒の傳染を防
まず其患ひを免らせしむし生前に骨傷の知
を兼る者ハ膿毒の傳染を防ぐを以て肝要とす
たとへん腿骨傷の波及して髌骨に裂隙を致す

の如く屍を解きて始ては... 其傳染の速する
ハ是を防ぐの術す... 當時一將士を療せしこと
あり左臂三隅筋の中央より彈丸を採取すに
此九筋の傷所ハ勿論肩節より此焮衝を以
骨面より傷所ハ勿論肩節より此焮衝を以
是れ... 然るに八日を過さず右の肋骨焮衝
を發し膿毒の症よく速く死せり其屍を解きて
見るに左の上臂骨の大起の所九に當りて凹
し所あり其上下ハ縦に裂けたり凡そ骨中の常
は多ける静脈中に膿を吸入すを息の吸氣に
應じて入るもの才もハ骨傷の體腔に近するに

従ひて弥々膿毒を病にやまよハ元より其理を
又人の體質によらぬ絶て膿毒に染るるも
のあり其死するを化膿の甚しきによらぬ
ハ大腿骨頸の砲創より久しく煩ハ膿毒を以
遂に死する者二人を見たり其屍を解きてに體
中より膿毒に染るる所あり

病際治法を論ず

○名醫エン十氏砲創を療し發明するたと何ぞて
云へばけるを何事をも作為せたる砲創ハ必ず
よく治せりと此言金言あり外科術の介抱過

ハ創者ニ益ナク凡そ傷者を治するに其要ニ
 つ創所を探搜するにあていすの時刻を移さざる
 創ハ砲路の長短廣狹を知り創内の物を砲丸衣
絨骨片去らんしに指を挿入し探りて害ナク若
 此物を探るに便しは猶豫せんは創口を
 縦ニ割り開きて左の指を挿入し指頭物にあ
 らん其指にそへて丸鉗をおくり物ニ届きたるハ
 指をこつたにぬき鉗をひらき物を拮り出す
 つ探針ハ決して用ゝてうらす動もすれば肉
 を破りて別路を作り丸のあても知らざる

やうにちりなん又丸の正しく骨に中りて返射
 つと曲折りて入ると思ひまらざる所に止まれば
 去とあはれ丸を抑弾入して肉中に隠れりて害
 の少なき丸を丸の肉中に止まると其う一骨
 を破りて永く化膿を者せんも治するもの數知
 せずはれ丸を探らんとて永く時刻を移すハ
 無益なる手足に中る丸の探り得へり又
 丸をかく探りて知るとそ別ニ皮肉を割開くハ
 ハ取て出さるる其皮肉にハ障りありて割開
 く去るとなると先つ打捨て天運に任すべし

傷骨の折片も亦丸に同一全く離れし物にあらずれハ去るべし破骨を取るに手段あり打過くとしに少許腐して其餘ハ遂に全く治するそのありあらずハ不思議ありしや骨衣は着きて離れし破骨ハ取て取て去るべしや骨衣は着きて起てて自ら離れ去り骨衣ハ創内に止まりて是より新した骨質を作るものありしハを鋸を以て骨の一所を断ち除くの術ハ緊要の術なりと云頗る危し骨衣を破て鋸を断ちし骨端をハたうしと連ね合せしむる故はあなうちに良法

とを云ふべし破骨をを去るるを小鋸と骨剪よりて事しむべし却て創口を廣げし骨傷所を破らしるるを佳とす但し折骨の断口碎けて茨のむしむけしむるにあらず者其碎面を平滑にしと連ね合せやすしむる也且肉も骨より離れて其肉を少しも損なはずに術を行ひ得べき者よのこ此術的當とす予の曾て此術を施せし者ハ大抵死せしむる一人輔肘骨を鋸を断ちて二寸程を取出し者よの命助りけし只治後腕ハ輔肘骨の方よ向ひて曲り其運轉不自由なる

るのこ此術を行とす治する者亦少なりす
 ○砲丸より骨を崩し或ハ化膿より骨を破骨難
 或ハ傷骨膿化すれを傷所治すれとそ短縮を
 遺すのあり一士傷を輔肘骨に受に九日を
 膿化し輔肘骨の一大片を採取しハ
 腕ハ輔肘骨の方に向ひて引縮められと傷端
 相連合をさしハ曲るのこす少く運動を
 妨くるのこなり若骨質を多くさしぬハ假較
 を致す者さ下顎骨下臂骨より予多く見
 ○傷所日を経ハ焮衝を起し砲丸の入路緊し

張ア指を挿入し傷者も其痛も堪
 へし物を取て出すつらす是を探搜する
 ハ尤も意を注するにあれ凡そ傷所を保全する
 の望もあれハ強て探搜するつらす若し傷つは
 て時刻の移らゆるもれハ穢物を去て傷骨の固
 りを凝て結する血を攘ふに創口を割て開く
 者れと已に一晝夜も過ぬハ要あり時過て割
 開きハ空氣傷所に入て結ふ血は血はふ
 きて是を溶し其解散を適えさしむるの
 こあらす化膿を起し焮衝を増し傷骨の腐死を

促クぬかく此トとく焮衝劇ク起ラれハ
 たりハ離レ骨片ハおのつクら全ク放シて碎片
 ハおのつク脱ケソつるなり此ノ骨折を見
 て心知ルつテチピーテレン名ハ砲創の骨傷を
 分ちて三段とたカ其論ヲに宜ク取リて
 則トたテ第一段ハ新創を摸搜りてたカち
 に取リて出せる破骨を云ふ第二段ハ骨質をたカ
 ると肉ニ着キとくキる所ある破骨を云
 ふ化膿を待て初て放ス者チたカ其位置ニ
 かクるニて放スに遅速あリ若シ浮キて淺キ

所ニあリハ第五日ヨりテ自ら落ツハシ若シ
 深くあリて大きキハ数日の後抜去るニあリ
 されを縦チに出シ又安放瀉血寒菴を行
 ひて焮衝の猛勢を折ケハ破骨の放スハ遅キ
 小此チ防焮方を行ハ只シ琴布のニを行ハを
 其放スハ早ク第三段ハ傷骨の折端焮衝を
 起シて腐死するニを云ふ其折端大きキれを
 生骨ト放ス事ト遅ク癒ゆる事ト永
 くテ其上に短縮醜形を遺ス者チ此物瘡内
 異物ト去リ能ク化膿を蘊蓄ス

○凡そ治癒を妨ぐるものをつとめて制伏するハ
醫士の緊要なり骨碎け肉爛と是を兼て尿管神
經に損傷あるハ劇しき焮衝を起して防げとを
さぐるは彈丸衣服の一片あるハ裂骨の間と
らかりてあるハために膿瘡となり遂に壞死に
變るちとある焮衝性壞死を抑制する最要の法
ハ安放法防焮法誘導法の三法なり

○骨傷四支あるを安放して少しも動すつら
す創所を處置するにも揺さくして瘻し得つら
やうしめて置つて傷所を害するハこれを高く

揚るより甚しきハ一士上臂骨頭の邊頭二
寸許下部を傷アに其時肩較より切り除く
1 當る所あらされハ救ひようあるアと皆言はせし
と予先つ試に繃帯を施して安放すつと命
けり程過て診に果して治すよの景況あり
然るは傷者訴ふるに情けなくも打捨おるハ
故に己の繃帯ハ蛆虫此生ずるにいたまると
いひしハ答ふるに由えあれと膊を保全せし
ハ全く其賜なりと云ひたり安放法ハ此の
とく効ある者なりと世間普く其利益を知らず

繃帯を換んとして隈アに揺り或ハ揚げ或ハ擦
ア或ハ乾うをハ創者痛之劇しく血を出し
且炊衝を護すの恐もあり嘆すつと事あらす
予尤も亦もする所あり故に大に謹みて安放法
に従ひちハ其憂を避るハかゝる事にあらず

○其次ハ防炊法あり大家ヨシヒンテル氏ハ四支
ハ損傷ハ頭胸腹の如くには刺絡効まさ者とい
えれハハ創醫多くハ志ありと思つり予ハ志
ハ思ハ常の骨傷も其効まさにあらず殊に
此度の野戦の砲傷ハ數多く實驗して弥々刺

絡の効ありけるを證せり但し今の代ハ諸種の
肺炊衝すら瀉血を以て治せりハ大傷ハ勿
論頭蓋胸腹の損傷も瀉血を行ハすて治すハ
いとみる思つり腺縮小ハ創傷の初めに顯る
症も此時ハ刺絡を禁すハ若し是に刺絡
すれば脈縮小を増すつと事あり刺絡適當の期ハ
震撞やして第三日の内あり已に化膿を生ず
るに及ひちハ刺絡の主治とすハうらハ是に代
るも水蛭又ハ刺開を行ハすハ水蛭ハ創所の炊
腫を著しく退け猶その圍りに及んハの餘焔を

殺くそのあり其効刺開に勝たり刺開ハ膿を漏
すの効をうひたり凡そ砲創ハ化膿の時期遅き
ゆゑ弟三日の後刺絡妙効あるとあり抑衆醫
肉創ハ瀉血を禁する理を尋ゆる傷者衰
弱して甚しく化膿するの恐あるに由より殊
々衝血積の時に於いて其勢ひを折けハ化膿い
よく少きと云事を知られハちり血積の時
期ハ當りて化膿將ハ甚しく来らんとするを制
伏するハ瀉血の外ハ他術あらハ其効よく
危険症を未萌ハ防くア上支の砲創四日を出

ても化膿を待して死するその多きハ焮衝症
と熱の譫語と緊腫劇ハ時よき少皆回循
して刺絡せざるの罪あり全身のチヒユス症を顯
創所すくハ弟初日より腐敗状ハ變するものと
弟五六日ハ膿毒を顯すものハ此論の外あり
三十年前ハ比すハ今世の病ハ焮衝性少き
ハハ衆醫士の自ら實驗して各知る所あり内
科醫士の管る疾病ハの流行性肺焮衝のたつと
そのと健康壯年身を原野ハ暴らして軍陣ハ臨
みて死を顧みざる士卒の創傷とその治法豈
日を同じて論すハ人予瀉血を無益とせざる

砲義論 卷一 九 齊民清言 載版

論ハ英佛軍醫の説ト符合セシ其當否ハ弱冠醫士の今より醫術を施し試みて識るべき所あり
○寒罨法を瀉血ニ兼ニ行ハ其効驗尤モ妙あり
千八百四十九年の役ニ氷を以て用ゐ
其前年千八百四十八年フレールブルフの役ニ予正ニ氷片を用ゐて疼を消し困苦を免らしめハ實驗する所あり寒罨法を行ふハ先つ創所ニ油ニ蘸セテ撒糸を貼し其上ニ寒物を置き乾撒糸墊巾を次第ニ覆ひ條布以てより包縛すハ絆創膏ハ用ゐるべし

ハ氷を以て水を代へ用ゐるハ其効頗る劣り寒罨法の主治ハ焮衝を折し化膿を制するにあり乃ち傷骨の圍ニ此筋肉の間ニ結ぶる血を消散^{吸収}せしむる効あり若し寒罨法を行はば焮衝化膿^収るハ凝血溶けて膿瘡ニ化し焮衝其周りを圍ニ静脈を壓塞し血の歸路を妨げ更ニ鬱結して全支遂ニ浮腫するなり此浮腫ハ軍醫常に見る所の症なり如何の理より生ずるといふ事を考究するその少くハ只静脈焮衝の前兆との心得て是を生ず

る者ハ必ず死するとの思ハ凡そ此症ハ初
より寒瘃法を行ふ者ハ少あり直ニ琵琶布を貼
する者ハ多く起るを見る

○温暖の時節ハ傷者寒瘃法ハたゞの堪へぬ也
ハ速ニ去るハ是を去る直ニ琵琶布を行ふ症
ハ稀なり寒冷より追々温暖ニ移るハ又鉛糖
水ですりあせりて行ひてより琵琶布殊ニ緊
要する症あり就中腕骨胛骨下臂骨小腿骨の折
端筋肉を撞き貫き者ハ外創を化膿して破

骨を導き出す非常の驗ありと衆醫の論ニ
てハ琵琶布より傷支を上より下まで全覆すハ
繃帯よりぬきの効他物ニ勝るをいふも
琵琶布を換るちとに傷處を揺すの害ハ琵琶布の効
の償ふ所ニあらざるを知らず凡琵琶布ハ傷所の
みを覆ふより足まりとて琵琶布の上よりそ
蠟布又ハ綿絮又ハ毛布を抄ふて其温氣の發散
を防ぐ砲骨傷ニ初より琵琶布を行ハ甚危
ハハ名ハ是を行ハ常ニ切斷術を施
すに至ると云り全く然る程ニあらず

せしむるも、毳布ハ、腱膜緊張を弛め、創内の汚汁を
泄し、且皮膚の機能を進めて、膿汁の解散を促す
ものなり、然るも世醫普く用ふる所ハ、是を行ふ
創者に愈快を覺え、忽ち疼痛を忘るゝむる所
ニあり、而れど傷者ニ一度是を用ふるハ、數月を
経て去り、強て去り、乾縮布ニ換ふるハ、疼
み復ひ生ず、故ニ戰場ニてハ、斟酌して用ふる
毳布を去るの期来らハ、速に去るべし、因循すハ
ハ、傷支の生機衰へて、水腫を起し、肉芽努張して
歛ず、創を収斂するの時至らハ、アラ子ル

布名ヨク、編縛するを善とす
西... 膏

○第三の治法ハ、創内より瀉出つゝ汚汁を導泄す
るにあり、導泄法ハ、膿汁を漏れ易くするハ、云々
及、又、創内の焮衝の初めに醸せし稀汁を漏
て、其焮衝の勢を折さ、化膿に至らしめ、さきハ緊
要の一術とす、彼の腱膜の裡ニ焮衝を起し、滲出
つゝ汁稀き時早く、腱膜を切り開け、稀汁漏れ
て、跡ハ、單創を遺すの如し、然るに、切開法を怠るハ
焮衝も、いさゝか化膿甚しく、終ニハ命を殞すに
至り、此時に臨み、切開法を行ふも、其驗あり

石... 卷一... 十一...

砲創も亦然り砲丸の四支も中りたる時正直を
まハ骨を傷り稀汁を出すも少なきと斜に
骨もあられハ返射りて別路を開き筋肉を破裂
して臑膜の裡に一洞を作し忽ち稀汁を洞内
鬱積す砲丸の入路より指より探せし其迂路
を知りて且速に丸路緊張して狭すハ指
汁漏るる道あり此症に逢ハ予ハ丸の入路
より指を挿し是に従て尖球刀を送り臑膜或ハ
肉を縦に切開きて症より出て出路を稀汁を導泄
するを肝要とすされと今世の醫風よりハ異物

を抜去るる又ハ血脉を綁紮するにあらしめれを
徒ら痛苦を増すの事なりとて砲創に切開法
を行ハざるなり凡効驗著しき方藥ハ一時ハ金
玉の古く愛惜するも亦一時ハ凡礫の古く
に棄て顧ざるハ世間の常態を一度棄られ
切開法も今將に再び用らるる時來まるる
一此に切開法的當とす傷症の一二を挙げ
て云はん予軍陳もある際砲創の迂路を作るも
の立地に其處を切開けハ創口自ら治るべき
猶豫して切開らる化膿ひろくを危嶮とする

砲創論 卷一 十一 齊東野語 藏板

石野言 卷一
三三 疥癩疥癬疥癩
のりやうに至るハ數多し殊ニ大腿の砲創膿
瘡を大血脉の側ニ作る者ハ尤も危し是を
捨おけハ腿静脈膿ニ染るて炊衝を起し膿毒を
發して死する者あり骨を傷ける者も多く見
ゆり創口を切開くの外ハ膿の重きより自ら創
口より流き出て創内ニ少しも滞らざるやうに
しるし若し滞る所あるハ其障をを開くし若
し膿路を作して其外皮破れ出る者と又ハ破る
處とも狭き者とも共に切開くし若し膿汁別
の所ニ落て膿瘡を作し波動正しく指ニ應ずれば

ハ其所を切開くし但し早く水蛭を貼し又ハ
切開けハ膿瘡ニ至らすして消え散るゆゆけハ
と此を切開くにハ又熟煉の手をとりて却て害
多し創口を切開き流き出る汁の止む時をさ
やうに傷所を處置し繃帯ハ宜しきに應じて輕
疎ニ施すを善とす然るに近頃の惡弊を綿撒
糸にて創口を塞ぎ絆創膏を是を固封し又墊
巾と繃布にて纏絡して膿汁を漏らさしめす一
晝夜を過て繃帯を換ふる時ニ撒糸を扱けハ鬱
積する膿汁送り出つ即ち醫士両手を掛けて創

邊に壓迫して膿の殘滴を淋らし、尤其さゆ恰も物を絞搾するの如し。此募行よりして兩三日の内、緩性無臭の黄膿已に變じて酷性の綠色となり、惡臭を放つ然るに、また悟らす。驅泄繃帶を行ふ此繃帶ハ膿汁をハ導泄せしめて鬱積せしむるの故に害ありを効なき。今其益を見し人々更ニ射注法を無行ふ其料ハ通例消酸銀水加密列浸ホロール水幾那煎汁微温湯尤等を膿汁鬱積すれば、良性に復るの期あるを知らず、且射注藥の創内に少く止るも已に膿汁

を惡性に變らしむると云ふことを悟らす歎息の至りたりや、冀くハ我獨乙國の醫士たるも此彼賣藥兒のたせしむる如き所業をなさざることを毎日膿を絞て出せハ傷者疼くに堪ふべからずして毫も益あることを却て其害數つたり。是切開法に若くは所を傷者の竊に屢云を聴くに切開くは、瞬息の間、且堪へやすんば、膿汁を絞て出さるハ、忍び難く、殆ど死に至るの思ひをなせりと。

○治法宜しうらす良膿變じて酷烈とあり惡臭を

放つ者ハ瘡口を切ひろけ或ハ新ハ口を切開
 きて膿汁を絶えず導泄すハ膿性忽ち舊より
 復へり其量も減り身力の疲勞日あらすして快
 復す予専ら云ふ切開法ハ世間よくハ皆只膿汁
 の落て膿瘡を生し由て發する所の恐るべき症
 ものこ治せりと思つ予野戦の間ニ實驗して
 証するに膿瘡ニ二種あり一ハ膿汁落下して瘡
 をちす者是を真膿瘡と云一ハ焮衝のためニ化
 膿する者是を焮衝性膿瘡と云真膿瘡ハ蜂巢織
 中殊ニ腱膜の裡ニ醸ち膿の其重きにて半ハ

蜂巢織を漉過し半ハ其層間を通過して低き所
 へ落て一瘡を作り其内ニ膿を鬱蓄するそのち
 へ焮衝性膿瘡ハ新ハ焮衝を起し其所腫れて
 硬く是を切開けハ稀汁のこを漏す琶布を両三
 日施して後切開けハ稀汁中ニ膿汁を混る所あ
 べ然ちハ腱膜の裡ニ稀汁を漉出し其性酷烈な
 ちハ焮衝を起して膿ニ化するそのちへ一是
 両瘡の異なる所よく治法ニハ此區別緊要あり
 真膿瘡ハ膿路を切開くつく焮衝性膿瘡ハ水
 蛭にて血を吸ちり其蔓延を制すへ

○攝生ハ防炊法ニ應テ食料を減シ清涼の飲料
 淡薄の汁のこを與フ一或ハ數週間是のこ
 を用ル好まぬのあり衆醫飲食を節にせしめ
 意を盡し猥ニ滋肉を與ヘ身力の衰弱を一時ニ
 回復せんと思フハ誤あり食料胃ニ適せられハ
 必ず胃痛を起すものあり傷者の欲するものを
 少く食しむるを好トす滋味の物過ニハ化膿
 止まずして炊衝更ニ起すを穀食のこすハ化
 膿忽ち減す故ニ予ハ初め危急の症顯る者ニ

ハ嚴シク肉食を禁シ其症を凌リハ只身力の
 衰弱遺ニハ是を回復セしむる時のこ滋養の物
 を許セリ

具名療治後の経過

○幸福の者ハ炊衝症速ニ減シて膿少しく破骨自
 ち創内より抜け出る者あり若し出血し易き肉芽
 を創ニ生ずると破骨放るの兆とす細くは探
 して取て出すし丸と共に打ち出すし布片の
 如きは膿と共に漏れ出る者あり異物去り盡ハ
 ハ膿ハ即時ニ減する者あり此れと死骨盡ハハ

ハ創口斂らず衆醫死骨を探と得きハ是を暴に
 採取らんと思ふハ誤あり死骨の生骨より離る
 るを待てし海綿を創内ニ挿んで其道を廣く
 し益あり予一度海綿ニ代つて永き綿撒糸を創
 路に挿しに膿の漏泄を妨げ創内の焮衝復ひ
 起り傷者ニ無用の痛を覺えしめ少くも其益を
 見たり又綿撒糸を去れ死骨探針ニ當ると
 創口速ニ愈しを見し是死骨薄くして細く
 砕け粉齋とちるる漏泄すされハ死骨大なるも
 のハ刀より創を切開き取出すを尤も善とす其

小き者ハ自ら砕けて膿と共に出つるなり

○砲丸ニ打ち骨傷の尤も危きものハ膿毒病を
 第一骨傷者を遠方ニ運ひ送るめれ死膿毒を
 病むあり第二膿創者の曾て集り居る病院ニ
 入れハ新創者膿毒を病むあり其れのとあらす
 内臓病殊にチヒユス病人の輻輳する病院にてハ
 膿毒を醸すの故ニ創者を入るる處を忌むハ
 第三外科術を行ひて骨髓に空氣感入し或ハ
 膿汁より汚染せらるるハ膿毒を病むやすし千
 八百四十八年と其前年の戦に斷骨術を行ひ

跡より多く膿毒病の流行せしハ此故あり膿毒
病の経過に急慢あり急なるものハ第五六日
及びて寒戦黄胖嘔氣吐逆胆汁を等の症を顕ハ
して忽ち死す慢き者ハ數週の後に至りて起り
初め寒戦あり常ありざるの虚憊を顕たり食慾
失せ脉疾小に變る所より知る一發後の経過
に更遅速あり其遅き者ハ兩三月を過て肺癰
より死す下支の損傷にハ頑き下利を續發して
死するもの少あるらす其屍を解きて大腸の粘
膜を見るに假膜を作して其裡面を蔽へ此頑

利よりハ鉛糖阿片の和劑を内服せしめて妙効あり
且上支の損傷にハ肺癰を引出し寒戦數週の間
止まざる者よりハ「キニー」子驗あり然きとも命を
救ひしより膿毒病より死する者初めより少し
も寒戦あり是に代りて痙攣症殊に呃逆を發す
るものあり

○細脉の出血其原因ハ既論せり細脉出血の故
に切斷法を行つハ速に死す其血脉の大幹を綁
紮するも効あり又放去し大破骨を抜去りて出
血姑く息をゆるむ膿毒を煩きて死を免るへの

らず臂動脈を傷了く第三週の後初めく動脈出
 血を發せざる者あり臂骨既く死壞せざるの故は是
 を切斷ちり初め血を夥しく失つる故は虚脱
 して終く死せり凡そ出血甚く者ハ先壓止方
 を行ふを緊要とすつさに其時よのそくは是を
 忘れハふに古とそや

砲痕論卷一終



